
その想いは変わりますか？AFTER STORY

畠山香樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その想いは変わりますか? AFTER STORY

【Zコード】

Z0684S

【作者名】

畠山香樹

【あらすじ】

『その想いは変わりますか?』の七年後のストーリーです。

登場人物は『その想いは変わりますか?』の方を見てください。
かなり短いです。

本一人称は、主人公の彼女である穂菜ちゃんです。

短いとはいえ女の子をメインにするのは初めてなので、ちゃんとといけるのかどうか不安ですが、頑張っていきたいと思います。

感想評価をお待ちしています

第一話 『七年後もいちゃいちゃやつてます』

とある町にある五階建てのマンションの四階の一一番奥の一室。そこが私と、私の好きな人が住んでいる部屋。

その部屋で私は、

「ちよつと夕馬！テレビなんて見てないで掃除やつてよー！」

好きな人を叱っていました

「掃除つて、まだやらなくともいいでしょ。それに僕料理作つてるんだから、掃除くらいは穂菜がやりな。休みの日は『口口口』させて

夕馬は一向にして座つてゐるソファーから動じつとしない。

「私だって仕事してるんだから、そんな言い訳通用しないよ！」

「だから、僕は料理してるんだって。掃除くらい女がやればいいじ
やん」

「アーニーのは偏見でしょ？…タ馬最低だよ。」「最低で結構。わざと掃除やつな」

シツシツと手を振る夕馬。

私はもう我慢の限界が訪れた。

泣き叫びながら、でもマンショントリニティを考慮して極力音量を小さくしながら夕馬くんに抱きついた。

夕馬くんはおみじと頭を撫でてくれた。

「うめん、僕もそろそろ無理だった。よく頑張ったね」

「うう、ほんとめんなさい。私から言つたの!」

そう、これは私から夕馬くんにお願いしたのだ。

喧嘩する彼氏彼女を演じてほしいと。

それなのに自分が先に限界を迎えるやうなんて……。

「だから、わざわざそんなことしなくてもいいでしょ？参考にした
いなら梨久にでも頼めばよかつたんだし」

「で、でもでも、梨久ちゃん私が本書いてるって知らないでしょ？なんか恥ずかしくて。それに梨久ちゃんだつて忙しそうだし」

私がそれを夕馬くんに頼んだ理由、それは私の仕事に関係する。

大学在学中に小説書いて一、二度投稿したら、それが当たつてしま

そしたらやつたが、本として出してもいいませんか、とこのうい提案

をいただきまして。

今ちょっと気持ちが分からぬことがあります。

そして夕馬くんに頼んで喧嘩をしてみたんです。

実際夕馬くんを罵倒しての罪悪感しか生まれずにそれだけではなくなつてしまつて、この状態になつてしまつたとこつわけです。

因みに私たちは付き合つてから七年、自他共に認める程にラブラブで、それはこのマンションの中でも周知の事実で、こちやラブカップという称号をもらつた。

しかもこの称号の凄いのは、大学を卒業してからここを借りたんですけど、まだ一ヶ月も経つていない。

それでマンション中に知れ渡つているのは、恥ずかしい気持ちもあるけど、誇りしい気持ちもある。

「で、どうするの? 書けそ?」

「う、ううへん。分かんない……」

「ん~、快斗たちに聞いてみる?」

「へ、平氣かな?」

「多分ね」

夕馬くんは電話を取り出すと、快斗くんに電話を掛ける。

「もしもし、快斗? あのさ、どうちか来れる? はい。
...じゃあ頼む。 そうそう、それ。 はい。ん、じゃね

「ピッ」と電話を切つた。

「来れるつて」

「よかつた」

快斗くんたちも私たちと回じマンションの一階アパートに住んでいる。多分すぐ来てくれると思つ。

「えと、なんか用意した方がいいかな？」

「ん~、確かにキッチンの一番右上の棚にあったような……」

え、それって……

「あ、違う。それ穂菜のマル秘小説だった」

「え、ちよま、え、ちよつちよー? ゆタ馬くん! ? な、なななん
でそれ知つてるのー?」

「なんでつて、穂菜にさつき掃除してつて言われたから、過去に戾
つて隅々掃除したんだよ」

「な、何それ! ?」

「いや、驚きだつたよ。一重底は定番だけど、まさか奥に一枚板貼
つてるなんて。しかも天井、つて言つのかな? まあ取り敢えずその
上にも貼つて。奥の一枚を外さないと上が外せないつていう巧妙な
三重の仕掛けをして。僕にあんなことしてほしかつたの?」

「う、ううう……」

私は瞳に涙を浮かべながら頑垂れる。

私が隠した、夕馬くん曰くマル秘小説は、その、高校……一年の頃かな？

ちょっとえつちなもので、興味本意で書いてみたんだけど、いざ完成すると恥ずかしくなって。

でも捨てたら、誰かに見られちゃうんじゃないと思つたら捨てられなくて。

燃やせる場所がなかつたのをずっと持つてたんだけど。

「その…………」めん、なさい…………。ズズツ、軽蔑、したよね？」

もう諦めてたとき、ぎゅっと抱き締められた。

「だあいじょおぶ。ちょっと驚いただけだから。まだ好きだよ、穂菜。誰にも言わないし、あそこからも出さないよ。ていうかあいうのに興味持つのは普通でしょ。泣くほどじやないよ

「…………ほんと？」

「ほんと。だから」

夕馬くんは指で私の涙を拭ってくれた。

「もう泣かないで、顔を真っ赤にして恥ずかしがって僕を悶えさせて

て」

「…………え、その、夕馬くん？な、なんか話が違くない？」

「会ってるよ。周りの空気が変わるんだから。そんな泣いてる穂菜
より、まだ恥ずかしがってる方が嬉しい。だから、穂菜は僕を喜ば
してよ」

「…………」

私は夕馬くんと回り歩いたと抱き締めた。

「ううと快斗さん、これビビりますっ。」

「ん~、これはですね、千佳音さん。わざわざ俺たちを呼んで抱き
合ひの姿を見せるなんて、見せつけたかったんじゃないのかな?」

「わわわわわわ、と私だけでなく夕馬くんも声のある方へ首を向ける。

そこには、先ほど夕馬くんが呼んでくれた、快斗くんと千佳音ちゃん
がひそひそ話をするように、でも音量は私たちに聞こえるように
会話をしている。

「あ、ああ、あの、一人とも、ビー、ビーから?」

「『周囲の空気が変わるんだから』からだよ。ねえ、なんなの?何
してるの?」

千佳音ちゃんが田代アジで睨み付けられました。

「え、えっと……夕馬くん」

「ただ愛を確認してただけだよ」

そう言つて私から離れた。

快斗くんと千佳音ちゃんは、私たちが付き合つてはじめて三ヶ月後くらこに付き合い始めた。

切つ掛けとかは特にないらしく、いつの間にか付き合つた、つていう話になつて、今じゃごじれることもなく仲良く同姓中。

「何それ？あんたたちがそろ行つたら人前でチュツチュしちゃうんじやないの？」

呆れながら千佳音ちやんは言つ。
私たちそこまで見られてたんだ。

「流石にそんなことはしないって」

「やうだよつ。そんなことしたら周りの人々がタ馬くんを引いぢやうでしょ？」

タ馬くんが周りの人々に嫌われるの嫌だ。

「うん、僕も穂菜が引かれるのは嫌だね。だから家の中でしかしない

「タ馬くん……」

好きな人と同じ気持ちになれたのは、とっても嬉しい。

「……千佳音、ごめん。俺あそこまでお前愛せない」

「安心しなさい快斗。わたしもあんなの無理。いつも通りで許して

ね

いきなり一人が謝り出した。

なんでだろう?

さつきまで喧嘩でもしてたのかな?

……あ、喧嘩。

「ねえ快斗くん、千佳音ちゃん、聞きたいことがあるんだけど、いいかな?」

「何? 小説のこと? 俺らで答えられるならいいよ」

二人は私が小説書いてること知っていて、よく協力してくれたりしてくれている。

「今ね、恋人同士が喧嘩する心情が知りたいんだけど」

「へ? そんなの聞かなきゃ分かんない?」

千佳音ちゃんが意外そうな顔をする。

「だ、だって、私夕馬くんと喧嘩したことないから……」

「千佳音、じつこいつやつらなんだよ」

「……そうだったね。あんたたちそういうや一度も喧嘩したことないんだね」

「千佳音は最近喧嘩した?」

「ん~、最近は……なんであのマンガ買ひにいなかったのよ…?でもめたかな」

「あれはしようがなかつたんだよ。人がいっぽいいたし道の途中で困つてる人がいたし」

「随分しようもない」と喧嘩してゐるね一人とも

「いいだろ別に。喧嘩するほど仲がいいっていつ。なあ千佳音」「その通りだよ快斗。喧嘩しない方がおかしい。そんなことじゅすぐには破局するから」

それを聞いて、私はちよつとムキになつた。

「そんなことないもんつー私たちずっと一緒にもんつー」

「どねかな~。喧嘩しないってことば、自分の意見が言えてないつてことでしょ? そんなのいつか破裂しちゅうよ?」

「別に喧嘩しなくても、そんなの話し合いで解決できるよつ。現に私も夕馬くんにいっぽい意見言つたし、夕馬くんも私にいっぽい意見言つし」

「あ、一言で言つれば人それそれでいいことで」

「まとめるな~夕馬。で、話戻すけど穂菜、喧嘩つてどうこつシチコ~やつぱそれぞれだと思つんだけど」

「あ、えつとね、そういう細かいのじゃなくて、喧嘩してるとあつ

て相手のこと嫌いになっちゃうのかなって。それが分かんなくて。喧嘩してる最中も好きなままなのかな？」

うーん、と唸る快斗くん。

時折胡座をかいている膝の上を置いてる手で叩く。

「そんなこと考えたことねえな。千佳音ビリムヘ。」

「やう、だね。必死過ぎて好きか嫌いかなんて思わないよね。よく言つでしょ？頑張りすぎて周りが見えなくなる、とか。喧嘩してるとときは、ただ？どうにかして自分の意見を聞き入れてもらわないと？とか？どうして自分の意見が分からぬの？しか考えてないと思つよ。」

「なるほど……ありがと、快斗くん、千佳音ちゃん。」

「じゃ、一人はもう用なしだから帰つて。」

「「もつと他に言葉があるだろーー。」

「二人とも戻りつたりだね。ちょっと待つて。今お菓子持つてくるから」

「ども～」

「ありがと」

「穂菜は飲み物お願い」

「うん。カルピスでいい？」

「お構い無く〜」

ひらひら〜と千佳音ちゃんは手を振る。

私たちはキッチンまで行って色々用意した。

夕馬「どうも皆さん、22歳の樋口夕馬です」

穂菜
同じく22歳の種原穂菜です」

夕一なんか僕たち復活したね

穂「うん。アフターストーリー読みたいって人がいたし、
よつとだけどう書こうか思い付いたらしいし」
作者もち

夕「それで、どうして今日この日三月三十一日に投稿したかというと、作者の誕生日だからです」

作者『どうも、作者です。二人とも久しぶり）。まあ『四人の魔法使い』でちょこっと出てきたけどね』

穗
—
でも私たちは七年ぶりで「どうなってるかな?」

「まあそりゃだな」

夕 作者誕生日おめでとう

作「いやお前いきなりだな！？」

夕一早めにやつておいた方がいいかと思つて。ほら「

作「ん？」

夏哉&・真樹&・謙一&・なのは&・
イラ&・ナイメ「「「「「作者(さん)シ...」」」」

穂「うわっ、人がいっぱい」

真「……え? 穂菜、さん?」

穂「うん。そっちから見たら七年後の私だよ」

夏「え、それって、ビーチの」と?」

タ「つまり、次の小説は『その想いは変わりますか?』のアフター
ストーリーってこと。作者いわくかなり短いよ

な「本当なの?...?」

作「うん。十話にまとめるつもりだし、一話も1、2ページで抑え
るつもりだから」

ワ「ん~、なら大丈夫、なのか?」

ナ「いや、結局遅れる」とには変わらないし」

タ「……きみ、ワイラ・テイルスキ?」

ワ「そうだけ?」

タ「いろいろ大変だと思つけど、頑張つてね」

ワ「はあ」

作「はい！ではみんなお疲れそりそり」と終了させてしまった
ます。ではでは。小説は完結させるんで楽しみにしてください」

第一話『え、これって男主角がやるじゃん』

私は快斗君と千佳音ちゃんに、今執筆中の小説を見てもらっています。やつぱり読者の声つて書つのは必要だよね。因みに恋愛系を書いてる。

「どうかな？」

「うそ、俺は面白くと思つよ」

「わたしも。でもさ、この最初の方のトートつて、あんたらの実体験じゃないの？」

「あ、分かつちやつた？」

「分かつちやつた？じゃないわよ。今まで何度も聞いたことか……」

少しげんなりしてる気がするけど気にしない。

「だつて、夕馬くんす」に樂しことにつれでいつてくれるし、いろいろ氣を使ってくれるんだもん。凄くネタが書きやすくて」

「いやいや、別に僕が特別なことしてるんじゃないで、穂菜と一緒にだから、自然と楽しくなるんだよ」

「夕馬くん……。うん、そうだね。多分私も夕馬くん以外の人とでも、どんなところに行つても夕馬くんと以上には楽しめないよ」

「ありがと、穂菜」

「どういたしまして、夕馬くん」

お礼を言われて私は頬が緩んでしまう。

「ねえお父さん！わたしも夕馬ん家の穂菜ちゃんみたいにやつてほしい～！お願ひ～！」

するといきなり千佳音ちゃんが快斗君の袖をクイクイッと引っ張つて駄々をこねる。

「誰がお父さんだ。俺はやんねえよ」

「え～」

「えーじゃなーーー！」で俺らまでボケたら収集つかねえだろーーー！」

「僕たち別にボケて　」

「うるせえー！だいたい穂菜はともかくでめえは確信犯だろーーー！それからー！俺は千佳音の彼氏以外認めないーーー！」

「いやあああんつー！つすが快斗つーなんやかんや言つてわたしとラブラブ空氣作ろうとしてるー！大好きつーーー！」

「千佳音ちゃんはすー！」い喜びながら快斗君に抱きついた。快斗君も千佳音ちゃんを優しく抱き締める。

私は夕馬くんを見る。

夕馬くんと田が合った。

「「」」一人すゞ。」」ラブだね

「うふ。ちょっとかくわ

「「アンタが言つたなつーーー」」

私たちは一人にツツコまれた。

二人は離れた。

「あ、ねえねえ、話少し変えちゃダメかな?」

「ん?わたしは構わんよ」

「えつと、ちょっと待つてて」

私は、立つのがめんどくさかつたのでハイハイして目的の鞄のなかに入っている原稿用紙を取る。

そうしていると、後ろから声が聞こえた。

「穂菜ちゃんつておしつちゅいな～

「ほえつーーー？」

いきなり変なことを言わされたので、慌ててお尻を片手で隠す。

後ろを振り返れば、私のお尻に顔を近付けている千佳音ちゃんがい

た。

「うわあああっ！？」

驚きのあまり叫び声をあげてしまい、お尻を遠ざけようと膝を動かした。

しかしその時千佳音ちゃんの腕に当たってしまった。

ぼふつ。

千佳音ちゃんの顔が私のお尻に埋めた。

「え、あ……」

「わやああああああああああああああああああ」

先程より大きな叫び声をあげた。

לענין ר' ...

私は壁際で踞つた。

もう恥ずかしくて死んでしまいそうだ。
知人しかいないといつても恥ずかしいものは恥ずかしい。

「あ、え？ と、穂菜ちゃん？ ほんと？」めんね。悪気はなかつたの。

ただ単にいいな～って思つただけで。百合とか、お尻フフチとかじやないからね?」

ちひりじと、少しだけ顔をあげれば千佳音ちゃんが必死に謝つてゐるのが見えた。

「千佳音ちゃんのせいじゃないよ。ただ私が、あんなことで何叫んでるんだひつて思つて、それが物凄く恥ずかしいだけだから」「や～やめて!なんかこっち物凄く罪悪感生まれてるからーーーあ、

そうだ!穂菜ちゃんもわたしのお尻にダイブすれば」「

「向くひまじてんだよ。テンパりすぎだお前

パシッと快斗君が頭を叩く。

「夕馬、なんとかしてやつてくれ

「はこねー」

そう言つて夕馬くんは腰をあげて私の近くまで来るとい、両手で私の顔をあげて視線を交わらせる。

そして。

夕馬くんはキスをした。

「「「ブツー?」」

「いかから吹き出すよくな音が聞こえたけど、今は置いておけ。

夕馬くんのキスを味わおう。

しかし夕馬くんはすぐ顔を離してしまった。

ううう、もうちょっとだけ。

ねだるように夕馬くんを見れば、頭をなでなでされた。

「また後でね。それより、なんか僕たちに見せたいものがあるんじやないの？」

「あ、うん。ちょっと待つてね」

私はさつき取り出せなかつた原稿用紙を取り出す。
三人のもとに戻れば、快斗君が夕馬くんに質問した。

「あの、さ、夕馬君？確かに俺はなんとかしろとは言いましたよ？
でもなんでもちゅう？」

「だつて、一番元気にならない？」

「う、うーん、それはなんとも言えない気がするな～。どう快斗？」

「い、やー、なんかちがくね？でかもしかして夕馬も天然になつた
？」

「そんなことはないよ。ただ、どうすれば穂菜が元気になるかつて
考えたらあれが簡単だつたの。ね、穂菜」

「うん！」

「簡単、だと思つか？」

「いや、わたしにや無理ぞ。」「めんね快斗君、知り合ことはいえ人前でチューは出来ない」

「安心しろ、俺も無理だ」

「わあいー以心伝心ー！ー」

「以心伝心っていうか、これが普通なんだけどな。向こうが異常なだけで」

「「僕（私）たち普通だよ？」」

「で穂菜、見せたいやつって」

スルーされた……。

少し気分を下げるながら、持ってきたものを見せる。

「えつと、一応新しいやつを書いてみたの。キャラを私たちに似せて。ちょっと感想がほしいなって。全然出来てないんだけどね」

それを渡すと、三人一緒になつて読んでくれた。

第一話　『え、これって男主人公がやることじゃ』（後書き）

快斗「一話投稿ばんざ～い！源快斗です。快人じゃなくて快斗です」「千佳音「感想でいっぱい間違えられちゃつてるからね～。嬉しい限りです」

快「なんで！」

「たくさん間違えられますが、たくさん感想が来てるって
ことでしょう?」
「kiitiさん、kiitiさん感想ありがとうございます」

快「あ、ありがとうございます、でいいの？」

いいのいいの。どちらで、作者からもらったんだけど、

快
何を?

千一きぬうりのぬか漬け

快一何故に?』

千葉活動報告のところにガスキンからの贈り物。誕生日プレゼント

快「見てないかもしけないけどガスキンさんありがとうございます！」

ぱつぱりぱりぱり

千「もうやめました」

快「もうやめました」

千「もし、やめなくなつた」

快「まあな。あ、やつこやせ、感想であつた仕事何やつてますかつてこの質問に答えよーぜ」

千「やだ」

快「やだつて……」

千「言いたくないー言つたらみんなに引かれる」

快「穂菜は小説」

千「だから言つなつてー嫌いになるよーー別れるーー」

快「別に構わんよ。で、穂菜は小説家、夕馬は古本屋の正社員、俺は」

千「え、ちょ、や、快斗？ちょっと[冗談だつてば。]こんなことで別れないつてば。ねえ、好きだよ快斗」

快「大丈夫だつての。俺も別れる気は更々ない。てか必死こいて秀さん説き伏せたつていうのに別れたら死ぬわ」

千「あ、うん。そつだつたね……」

快「そうこう」と。まあそれ抜きにしてもお前のことは好きだし」
千「ありがとうございます。では皆さん、たつた一ページですが読んでくれて
ありがとうございます。感想評価待っています」

第二話『他人が見る、自分の慣れなことはしないこと』

「何これ？」

夕馬くんたちに新作小説を呼んでもらって、最初に言われたことがこれだった。

「えっと、夕馬くん？もしかして、つまらなかつた？」

確かに試作品、というか、試し書きなんだけど、そう言われたらちよつと不安になる。

「俺はいこと思つけど、千佳音はビビりへ。」

「わたしもいひつて思つたよ？夕馬どー」がダメなの？」

「いや、いい、ダメの問題じゃなくてさ、これ、僕たちをモテルにしたつて言つてたでしょ？」

「ああ、確かに言つてたな

「つまりさ、この主人公とその友人って、どっちがどっちだかは置いといて、僕たちでしょ？この一人を地の文がBLチックにしようとしてるでしょ？心が通じてるとか相性バツチリとか。普通に読めば普通の言葉だけど、ちょっと意味を変えればそっち系な意味にとれる」

「う、夕馬くん、痛いといひをついてくわ……。

「つまりそれは僕と快斗の絡みが見たいっていう穂菜の願望が表れてるってこと」

「……いやあ、それはちよつと無理ありすぎない？確かにそういう意味にとれるけれども、気にするようなものではないと思うけど」

「千佳音に一票。そりや流石に自意識過剰つてやつだろ。それとも何か？そういう本でも読んで意識しちゃつたか？」

快斗君がからかうように聞いた。

あれ?
ものすごいやな予感がする。

「あ、うん、ちゃんと読んだよ」

「う、えええつ！？」

夕馬くんの爆弾発言に一人は驚く

私は冷や汗が止まらない。

「まあ、といつても最初の方だけだつたけどね。タイトルは『マリナの男……』

「ふみやあああああつ！？なんで夕馬くんが知つてゐの！？私あれ
引き出しの奥にしまつ」

シ――――――ン。

しばし誰も動かなかつた。

「ところで、最近B」にはまつてねからそいつ思ひたわけです」

「納得」

「それから穂菜、その本は探した訳じゃなくて普通に机の上に置いてあつたからね」

「え……」

ほくほくほくほくちーん。

「……そ、うなんだ」「

「快斗君！千佳音ちゃん！そんな低いテンションで納得しないでよっ！」

「穂菜、大丈夫だよ。僕はそんな穂菜を応援するよ。まあ穂菜のために男を好きになれて言うのは無理だけど。で、穂菜。お前にひとつ

「な、何？」

恥ずかしくて膝に埋めていた顔を上げる。

「なんで僕と快斗がモデルなんだ」

ペシッ。

頭をはたかれた。

「ううう、痛いよ

「商業自得だ。やうごうじうが済しなやい」

「はあーーー

結構よかつたと思つたなんだけどなー。

「あ、言ひの忘れてたけどさ」

「ん? 何?」

「話は凄い面白かったよ」

「え、ほんと?」

「うさ。快斗と千佳音も言ひてたでしょ? ほんとだけ

「や、そつか。それじゃあ、うん、がんばるねー。」

「頑張れ。で、一人はんじて固まつてるの?」

「へ?」

快斗君と千佳音ちゃんを見ると、夕馬くんの言つた通り口を半開きにして固まつていた。

「え、快斗君、千佳音ちゃん、どうしたのっー?」

「や、い、え、だ、だつて、千佳音、なあ?」

「うん、ねえ快斗、今、夕馬が……」

「僕?」

私たちは顔を合わせて、首を傾げる。

「「夕馬が穂菜を叩いた」」

「……は?」

私は変な声をあげてしまった。

夕馬くんが私を叩いただけでどうしてそんなに驚くんだらう?

隣では、ああ、と納得した様子の夕馬くん。

「夕馬くん、どうこう」と?教えて

「つまり、二人は僕が穂菜の頭を叩くとは思わなかつたらしーの」

「だ、だつて！ ゆ、夕馬が！ 夕馬が呑くなんて！ ！」

「 そうだよ！ 一人めっちゃラブラブなのに！ しかも夕馬からとか！ おかしいだろ！ ！ 絶対明日雨とか槍とか降るってツ！ ！」

「歯と槍の差が激しそぎでしょ。てかそんなことで大騒ぎしないでよ。」といふひい普通でしょ!」

ペシツ

もう一度頭を叩かれた。

ううう、何度も叩かなくていいじゃんつ

バシジ

今度は私が夕馬くんの背中を叩く。

「やあやあやあやあやあ」――」

すると二人は叫び声をあげた。

「ちよいと迷ひで、今田やほいでしょ!! 絶対何かあるで!!」

「あ、あれじゃない！？ナツチャンでも座れしてくるんじゃないの！？」

なんか、凄い酷い」とを言われて、いる気がする。
というかどうして梨久ちゃんが出てくるんだろう!!

「まさか一人とも叫ばないの。静かにしないと穂菜の料理食べさせれるよ？」

「…………」

「わ～、一瞬で静かになった。

……夕馬くんにもひどいこと言われちゃった。
これでも少しあは成長したのに。

この沈黙の中、ひとつずつ音が響き渡る。

千佳音ちゃんの携帯電話だ。

「ああ失礼。お、恵里ちゃんだ。もしもし。…………へ？えええええええつー？」

突然叫んだのでビクツとなつた。

「う、うんっ、で？…………そ、うか、分かった」

携帯を聞じると、少しだけ青白くなつた顔をこりりに向ける。

「ナツチャンが怪我した」

「ええええええええええ？」

第二話　『他人が見る、自分の慣れないことはしなくて』（後書き）

穂菜「第二話」

夕馬「作者の計算なら後七話だつて」

穂「文章も話数も短いね」

夕「そうだね。そして後書きも短い」

穂「もう作者めんどくさくなつたんだろうね」

夕「うん。じゃあ斷る、また今度」

穂「コートコートさん改めてCourtさん、knightさん
ん感想ありがとうー」

第四話『何か計画を立てているやつだ』

「夕馬くん、明日だねー」

「一十五回目だけど、そうだね」

「へへへ」

こんな訳で、今ソファーに座って夕馬くんと一緒にテレビを見ている私は浮かれています。
ちゃんとテレビも見てるよ？

明日は六月一日。

この日は七年前、私が夕馬くんの告白を受けた日だ。
だからそれを記念して私たちはその日にデートする。
因みにその三日後には初デート、初キス記念と題してちよつと豪華な料理を食べる。

シェフは快斗君。

参加者は基本四人で、過去六回中一回ほど梨久ちゃんが参加した。
今回はどうも来れなやうとのこと。

「ねえ穂菜。小説の方は大丈夫なの？」
「…聞に合いませんでした？」
「つって言われるなら気が引けるよ？それに五日にもあるんだよ？
つらくない？」

夕馬くんが心配して気遣ってくれている。

私はそれに、大丈夫と答える。

「だいたい話の構成は作ったからね。後は「一曰二曰引き」もつてたらなんとかなるよ。今日も今休憩したらやるから。だから安心して」

そう言つて私は笑つた。

すると夕馬くんは私の髪を梳いてきた。

「別にね、無理とか無茶とかするなとか、そんなつらいんならやめなとかは言わないけど、疲れてるのだけは隠さないでね。僕は穂菜のやることは止められないし止めるきもないけど、気遣いくらいは

夕馬くんは怒った風でも、心配する風でもなく言った。
例えるなら確認、だろうか。

そんな夕馬くんの言葉に、私は素直に答えた。

「うん。実はかなり疲れ気味。もうそろそろ隠が出そうかも」

自分の目をこすりながら言つ。

「その隈直しよ。その状態でデータっていいうのは変な意味で田立

۱۹۷

「う、そうだね……。今何時?」

「おやつの時間プラス七分」

「ちよつと寝よつがな。夕馬くん、覚えてたら五時に起いしてくれ

ないかな？」

「いいよ。風呂どうする？起きた後入る？」

「お願いである？」

二二九

「ホントタ馬くんありがとう。助かるよ」

「まあこれも主夫の役目だからね。働く奥さんを陰ながら支える夫。これも板についてきたからね」

「わ、私たちまだ夫婦じやないよつ」

「でもおんぢやないつて顔してゐるよ」

「確かに、嬉しいけどさあ。あ、そういえば夕馬くんは仕事平気なの？今日と明日連続で休み取っちゃって」

「うん。それなりに店長からも信頼ももらつてゐるからね。」一田へいじ
「ならいにだつて」

「そ、う、な、ん、だ。夕、馬、く、ん、凄、い、ね、」

「ありがとう。じゃあ引き留めてもあれだしね。おやすみ」

「ハハ。おまかせ」

私は隣のちょっとと小さい寝室に入つて仮眠を取つた。

僕は「いつそり寝室を覗き見る。

昼なのにカーテンも閉め切つていて、戸を開けた光しかその空間を照らしていない。

その中で一人の女性が可愛らしい吐息を立てて寝ている。
女性というよりも少女と言つた方が、もしかしたらしつくつくるかもしだれない。
そんなことを言つた口にはどんな怒声が来るか分かったものではないが。

音を立てないよ^{ヒトエヒツ}戸^ドを閉める。

さて、これでこの部屋で活動出来る哺乳類は僕しかいない。
これで心置きなく行動出来る。
でもしかし、本当にそんなことをしてしまつのか？

僕は想像する。

こんなことをして穂菜はどんな反応をするだろ？

喜んでは、くれると思つ。

最悪感動のあまり泣いてしまうかもしれない。

うん、これはあつそつだ。

だからここは問題にはならないだろ？

問題は僕自身だ。

もしさんなことをして、そんなことをしてこの間、いつも通り無表情を突き通せるか？

自信はない。

でも気付かれたら終わりだ。

五分悩んだ。

そして出した結論はとこうと。

「やるだけやるか

取り敢えず準備をしようとこうとした。

「穂菜～、時間だよ～。起きる～。そうしないとキスするよ～

体が揺さぶられ、少しづつ頭が覚醒していく中、そんな声が頭の中に入った。

「んん～……、キスなら、してほしいから起きない……

「じゃあ遠慮なく

何が？

そう思つたら、唇に何か押しつけられた。

柔らかい。

そして熱い。

ゆつくり皿を開くと、夕馬くんの顔がドアップで視界に飛び込んだ。

「ん…………、んんっーー?」

夕馬くんにキスされた、と理解したら頭が一気に活性化していく。
眠気なんて吹き飛んだ。

ゆつくりと顔を離す。

「おはよつ穂菜。今五時だよ」

「な、な、なんでー夕馬くんなんでーー?」

「キス? それなら穂菜がキスしていって言つたからだよ」

「ふえ、私?」

少し思い返す。

言つた覚えのあるよつな、なによつな……。

多分寝ぼけて言つちやつたんだろう。

夕馬くんがこんなことで嘘つくなつないし。

「思つ出せないけど、いこや」

「いいんだ

「うん。 夕馬くんだからいいの。起こしてくれてありがとう」

私は体を覚ますために背筋を伸ばす。
筋が伸びるのが気持ちいい。

「風呂もう少ししたら入る？湯船は張つてあるけど？」

「あ、ん〜ん、もう入っちゃう」

「眠くなつて風呂で溺れないでよ」

「大丈夫。誰かさんのお陰で眠気は吹つ飛んじやつたから」

「やつ。ならよかつた」

布団から出て着替えを持ち、寝室からお風呂場へ向かう。
するとその途中、甘い香りが鼻腔をくすぐつた。
これは……栗？

「夕馬くん、栗買ったの？」

振り返つて訊ねる。

「栗、ていうかモンブラン。穂菜が寝てるとか近くでやすく売つて
たから買つて来ちゃつた。後で一緒に食べよう」

「ホント？ ありがとつー夕馬くん、今日は早めごはん食へや
おつ！」

私はモンブランを食べたいが為に夕馬くんにお願いする。

「分かったよ。じゃあ四十分くらいかかると思つから、とにかく先に入っちゃいな」

「はあー」

私は「機嫌なままお風呂に入る。

第四話　『何か計画を立てているようですが』（後書き）

千佳音「お風呂は！？」

穂菜一
へ?

千一入浴シーンはどうしたの、これで聞こえるのシーツ!!

穂一そ、そんなのあるわけないでしょ！」

千「おかしいじゃん！普通お風呂入るって言つたらその」の描写書いていろいろあつて夕馬が穂菜ちゃんの裸見ちゃつてキヤー キヤー！つて風になるじゃん！なんでなんないのー？」

穂「なんでそんなマンガみたいなことが起じると感ひしるのー? それから私は別に夕馬くんに見られても叫ばないもんー」

千「……ああ、そうだったね」

穂「な、なんでそこでかわいそつな子を見るような視線を送るの？」

穂「それは凄い気になるんですけど……」

穂「他の皆さんからも感想評価を待つてます。誤字脱字報告もぜひ

くださー

千「はあ。今更だけどさ、どうしてわたしの方が出番の数あつたのに穂菜ちゃんが今ここで主人公やってるんだろうね」

穂「主人公の彼女、だから?」

千「あれ?どうしてかな?涙が出てきちゃつたな」

穂「「めんなれ」……」

第五話『年に一度の一人だけの記念日』

六月一日、午前九時、マンション前。

今日は夕馬くんとデート、なんだけど……。

「わい、どこ行くか？」

全く行き先を決めていない。

と言つのも、決められたところに行くより自由気ままにぶらついて、おもしろいそなとこに行く、というデートスタイルが染み着いてしまつたから。

計画を立て行くつて言つのも楽しいけど、行き当たりばったりつて言つのも楽しいし。

「ん~、わうだね……。夕馬くんこの町完璧?」

「流石に二ヶ月やそこらじやね。ここから職場に向かう道しか詳しくないかな」

「じゃあ場所はこの町、方向は太陽に向かつて行つてみていい?」

考えなしに太陽を指さす。

天気は快晴、絶好のデート日和だ。

まあくもりでも雨でも相手が夕馬くんなら全く問題はないけど。

「太陽か……。あつちは……ねえ穂菜。ひとつ寄りたいところがあるんだけど」

「あ、うう。いいよ」

じゅあうじゅか、と声を掛けようとしたとき、逆に後ろから声を掛けられた。

「あい、夕馬君に穂菜ちゃん」

振り返れば、お隣の山口さんだった。

年齢は三十路を少し越えた程度で主婦をやっている。

「ねえよひざやこね。お仕事ですか?」

山口さんは快斗君と同じ飲食店のパートをやってる。

「ナリ。一人ナリ。」

「はー。今日はひょっと特別な日で」

「わー。ここわね苦く。楽しんでらっしゃここひやラブカップル

さん

山口さんは笑しながら私の脇を通りていった。

因みに? これがラブカップル? といつ称を私たちにくれたのもこの方。

「こいつをめーす」

「こいつをめーす」

夕馬くんが見送りの言葉を掛けると、山口さんも手を振りながら答えてくれた。

「僕たちも行こつか

「うん

私は夕馬くんの腕に抱きつきながら、マンションから出発する。

「あ、いい」

歩いていると、見慣れたお店があつた。

「こじまアクセサリーショップで、様々な可愛いものが売っている。

そして私は、そこの中のひとつの中商品に手を惹かれる。

「うわあ～……」

「ここに来るとこいつもそれを見つめる。

それとは、指輪だ。

ダイヤとかそういう宝石が散りばめられてるものではない。
そこまで高くない、銀色のリングに五つの小さな赤い石
ないからよく分からない が乗せられているもの。

詳しく

特に理由があるわけではない。
でも何故かこれが無性に可愛く見える。

「それが気に入ったの？」

隣で夕馬くんが聞いてくる。

「うふ。 なんてこいつが、これだつーつて感じがするんだ」

視線を指輪に向けたまま答える。

「じめんね。 今日はかつて上げられないから、別の日に穂菜が忘れた頃サプライズとして買ってあげるよ」

「ちよつと、夕馬くん? サプライズとか言つちやつたら全然サプライズにならないと思つんだけ?」

「だから穂菜が忘れた頃に渡すんだつて。 楽しみにしててね」

「そんな風に言われちやつたら忘れられないよ」

「じゃあそのことを考えられなくなるくらいに樂じへしてあげるよ」

「ふふふ。 お願ひします、夕馬くん」

「お願ひせねるよ。」の店の中に入る?」

「うふふ。 ここは何度か来たことあるから大丈夫。 夕馬くんの行きたいところは?」

「 もうすぐそこ 」。店長がいいカフュ あるからって

「 あ、だから朝ご飯ちょっと少な目だつたの？」

「 うふ。イチゴパフュ がおすすめなんだつて。一緒に食べよ 」

「 いいよ 」

私たちは 50 m ほど離れたお店に入る。

わんこカフュ といつ看板が立てられていて、そこには「わんちゃんも入つていい」

犬がいるのか犬が好きなのか、そんなことを考えながら店内に入る。

とても綺麗な内装で、シックな雰囲気を醸し出している。広いというわけではないけど、特に狭さは感じられない。中に犬はいなかつた。多分後者の方なんだと感づ。

「 いらっしゃいませ。一名様ですね。ではこちらにどうぞ 」

ウエイトレスさんが出迎えてくれて、私たちを一人掛け用の席に案内してくれた。

すぐに私はイチゴパフュ と、夕馬くんはバナナパフュ 、紅茶を二つ頼んだ。

二、三分ほどしてパフュ がやつてきた。イチゴもバナナも美味しそうだ。

まずは自分のを一口食べる。

口の中に甘さが広がり、時折イチゴの酸味が姿を現す。この絶妙なバランスがとてもおいしい。

「おいしい？」

「うんっ、すっごく。はい、夕馬くんあーん」

スプーンでひとすくいすると、それを夕馬くんに向ける。この味を夕馬くんにも味わって欲しい。

夕馬くんはすぐに開けてくれたので、その中に入れる。

「アーニー、おこない？」

「うふ、こしらへる。」ひねり食べてゐる。」

そういうて今度は夕馬くんがバナナパフェに入れる。

一
お
ん

-
お
ん

何度か咀嚼する。

ପାତ୍ରିକା

「おおじやくおこし」

自然と笑みがこぼれる。

「笑ってる穂菜可愛いよ」

突然夕馬くんにほめられた。

私の中では、照れよりも嬉しい方が率を占めている。

「ありがとうございます夕馬くん。夕馬くんも笑つてくれると嬉しいんだけどなあ」

そんなことを言えば、

「出来たらね」

と返される。

この問題は私の付き合い始めてからの課題で、楽しみのひとつである。

どうすれば夕馬くんは笑つてくれるのかな、と思いながら、その笑つた顔を想像してもだえる。

いつか笑顔にさせようと頑張ります。

「じゃあそろそろ次のところ行こうか」

パフェも食べちゃったので、私たちはこのお店を後にして次のところに向かつ。

第五話『年一回の一人だけの記念日』（後書き）

穂菜「今日は夕馬くんとのデートです」

夕馬「うん、そうだね」

穂「はは～、まだ一件田だかど凄く楽しそ～」

夕「僕は、楽しいこといっぱいキドキが止まつません」

穂「ゆうまく～ん、なんで今更ドキドキなの？夕馬くんまだデート緊張するの？」

夕「いや、デート 자체は平気なんだけど、今日は特別だからね」

穂「特別？」

夕「これは伏線なので、皆覚えておくれ！」

穂「伏線？分かった」

夕「……あ、やっぱりなしで。伏線回収出来る勇気がないです」

穂「ゆ、夕馬くん？なんか今日はこつもと違つて変だけど……もしかしてデートつま～」

ガク

夕「つまらなくなんてないよ。デートはすこしく楽し～よ。それだ

けは絶対。これは僕の問題だから、穂菜は関係、あるつて言えればあるけど、僕がすることだから。だから待つててね」

穂「うん。待つてるよ。ずっと……」

千佳音「何この茶番」

快斗「さあ?」

千「もう、じゃあいちゃいちゃカッフルのわたしたちが代わりに。C o l l t yさん、感想ありがとーーこれからも、よろしくう!」

快「なあ千佳音。俺ら、周りから見たら確かにいちゃいちゃしてると方だと思うけどさ、その、なんだ、あの二人見ると本当に俺らいちゃいちゃしてるのが分からなくなるんだけど……」

千「快斗……」

快「なんだ?」

千「あの一人はアブノーマルだから、見ちゃダメ」

快「わ、分かりました……」

第六話『気障な台詞は人によつては自爆する』

カフェテリアを出た私たちは、少し歩いたテパートに入る。
目的は買い物、ではない。

「夕馬くん、ホッケー やろ？！」

ゲームコーナーだ。

「いいよ」

頷く夕馬くん。

ゲームコーナー、ここは正直侮れない。

少し前までは子供の遊び場と思つていたけど、大人でも
でもつて楽しく遊べる。

実際子供だけじゃなくいい大人も熱中してやつているのも見受けら
れる。

私たちはそれぞれ定位位置につき、マレットを手にしてパットが出て
くるのを待つ。

パットが出てきた。

先攻は夕馬くん。

パットを思いつき叩き、私から見て左の壁にぶつける。
ガンガンガンと二回跳ね返り、左から私のゴールめがけて滑つてく
る。

かんつと軽く当ててパットを止める。

次は私の番。

夕馬くんとは違つて一直線で狙う。
ゴールの右端に狙いを付けて叩く。
しかし狙いはズレてゴールより少し右にぶつかる。
そのまま跳ね返つてこちらに戻ってきた。

それを止める」とはせずにもう一度、今度は左壁にぶつかるよう元気

叩く。

一回ほど壁にぶつかり、夕馬くんのゴールに入った。
カラソカラソというパットの音が聞こえた。

「やったあー先制点つ

「やられた……次行くよ

「よし、次も取る

そうは息込んだけど、夕馬くんの最初の一撃でゴールを決められてしまつた。

「はい、これで同点

「あうー、やられたー

それから接戦が続き、時間切れとなつてしまつた。

結果は十四対十六。
夕馬くんの勝ちだ。

「ふう、危なかつた。これで十一戦七勝四敗だね」

「ああ～、今日は勝てると思ったのに～。差が開いちやつた……」

「さて、次はどひする〜。」

「ううう、プリクラ取るのは、どうかな？」

近くにあるプリクラ機を指をして囁く。

「いいけど、二週間前に取らなかつた？」

「もうだけど、だめ？」

そうお願いすると、頭を撫でられた。

「こんな人前で上田遣いはやめましょ。僕どつにかなつそつだよ

「え、上田遣い？ 私そんなのやつてないよ？」

わつかの、ただお願いしただけだし。

夕馬くんは？ はあ～？ と大きなため息をついて、頭から手をビケた。

「じゃあ穂菜。早く撮つちやおつか

「あ、うん」

ため息の意味を考えてみたけど、特に思ひ多当たる節は見つからず、
なので今はとにかく精一杯夕馬くんといちやつきながらプリクラを
撮つた。

思いつきり抱きついたり抱きつかれたり、人が見てないことをいい
ことに家でやるようなことをいっぱいやつた。
決してエッチなことは一切やつてません！！

プリクラも撮り終わり、少しおなかも空いてきたのでフードコート
に足を運ばせ、ファーストフードを食べた。
いつもお皿は夕馬くんが作ってくれるお弁当なので、いつもも
新鮮だ。

ハンバーガーをぱくりと一口。

こんなに安くて美味しいのはホント凄いと思つ。

「ほら穂菜、子供じゃないんだからケチャップ周りに付けないの」

そう言つた夕馬くんは私の口元に手を伸ばし、付いたケチャップを
親指で拭うとそれを舐めた。

そんな行為が無性に恥ずかしくなつて、顔を赤くして足をばたばた
させる。

こうじう不意打ちは卑怯だと思つ。
これならキスの方がましだ。

「ねえ穂菜」

「な、な、何？」

「穂菜の脣、凄い柔らかいよ」

極めつけはこれだ。

もう我慢できなかつた。

でも理性を総動員させてテーブルに伏せるといつ行為で畠まらせた。

「どうしたの穂菜？ハンバーガー食べないの？早く恥ずかしがつて
る顔見せて」

確信犯だ。

いや夕馬くんの場合、確信犯じゃない行動の方が少ない。

ちょっとだけ反抗したくなつたので足で夕馬くんを蹴る。

「穂菜痛いよ。反抗期？僕のこと嫌いになつた？」

むしろ悪化してしまつた。

言わないとだめか。

夕馬くんだからな。

あ、私はMじゃないからね。

こういう辱めを受けてほんとは嫌なんだからね。

……まあ夕馬くんなら許せるけど。

「……大好きだよ」

「ホントに？」

「本当にだよ。」

「じゃあ今度はここが顔を見せておくれ」

「じつて年寄り口調?」

やつ想つたけど、まあこつもの『まぐれだ』と思つて『こなすこと』にした。

まだ赤い顔を少しあがると、皿の前にボテトが一本差し出された。た。

小ちく口を開けてそれをむしゃむしゃ食べる。

「穂菜」

「ん?」

むしゃむしゃ。

「穂菜を見ていの?」

むしゃむしゃ。

「なんか小動物を飼いたくなつてへるんだが。特にリスト

『じつ』。

「それは物凄く言葉を返しあうことだけだよ、現実的こいつが、うと
マンションペット禁止だよ。」

「ホントに現実的だね。だから、穂菜が僕のリストになってくれないかな?」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「穂菜」

「何?」

「今の僕はおかしかった。一言一句全て忘れて」

「うん。『じめん無理。もつ記憶しちゃった。でも意外だつたな~、
夕馬くんがそんな台詞選んでみたんだけど…………』

「ヤニヤが止まらない。」

「言ひ訳させへ」

「いいよ」

「穂菜にもつと恥ずかしい顔をしてもらおつと黙つたの。そしてキ
ザつたらしい言葉を選んでみたんだけど…………」

「なれない台詞で自爆しちやつたんだ」

「穂菜、お願ひだから忘れて」

「『だから、穂菜が僕のリスになつてくれないかな?』って言葉?」

「……穂菜僕のこと嫌い?」

「大好きだよ。そんな慣れない氣障な台詞を言つといひも含めて「じゃあ分かった。覚えてていい。誰にも言わないで。僕に出来ることなら何でもするから」

「そんな夕馬くん。夕馬くんに何をしてもらおうとか、そんなこと考えてないよ。誰にも言わないよ」

「穂菜……」

「あ、いまいい小説のアイディアが浮かんだ」

「穂菜、さよなら。僕天国でずっと穂菜のこと見守つてゐるから。今までりがと。来世で、また会えたらいいね」

そう言つて夕馬くんは立ち上が

「いやー!夕馬くんホント!」めんなさいーーー絶対誰にも言わなーいし、小説にも書かないからーだから死んじやだめーーー

「本当に誰にも言わない?」

「言わない言わないーー絶対快斗君にも言わないーー」

「約束だからね」

「うん、約束つ。本埠にめんなぞこ。ほんの出来心なのー。夕馬
くん打たれ弱いって知らなくて」

「うんまあ、僕のせいなんだけどね。じゃあ早く食べやおつか

「うん」

私たちは昼食を食べ終え、その後いろいろ買い物をして、楽しくゲ
ートを終えた。

第六話『氣障な台詞は人によつては自爆する』（後書き）

穂菜「これで『テートは終わりです』

千佳音「今更だけど、後書きつてどういう理屈で私たちを出しているの？『ハセ』めちゃくちゃじゃない？私夕馬と組んでないし、穂菜快斗と組んでないでしょ？それに夕馬と快斗も組んでないし」

穂「適当なんじゃないかな？」

千「やつぱり…」

穂「とにかく」

千「ん？」

穂「作者も今気がついたらしいんだけど、結局快斗君と千佳音ちゃんの職業言つてなかつたよね」

千「いや、言わなくつていいの…せつかく作者も『まかしたんだから…』！」

穂「快斗君は飲食店の正社員、千佳音ちゃんは『テート』です」

千「いやあああああつー言つやつた…この下せりつと言つやつた…！」

穂「どうも千佳音ちゃんは、快斗君がいっぱい稼ぐからまだ働かなくていいこと考えてるらしさです。パートくらいこはしょつよ」

千「いや。穂菜がいじめる……」

穂「現実を突きつけただけなんだけどな……」

千「それがいじめなの……」

穂「千佳音ちゃんほんと大丈夫なのかな……？あ、そう言えば作者が、『次話夕馬がかっこいいか今回みたいに自爆て恥ずかしい人になるか是非判断して教えてください』という言葉を残したんだけど……夕馬くん何するんだろう？まあそれもお楽しみってことで。ではみなさん、感想評価待つてます」

千「働きたくないわけじゃないんだもん……」

第七話『貴女へのサプライズをしたかったの』

六時二十一分。

デートが終わり、私たちは家に戻った。

「うわ～い、我が家だ～」

「そんな何日も空けた訳じゃないんだから。それにここアパートだから我が家って言つのはちょっと」

「へへ～、夕馬くんのこばわる～」

ほっぺを膨らませて拗ねてみる。

そしたら夕馬くんにほっぺをつつかれた。

「穂菜、びひしたの？ そんなマンガみたいなことして」

「ちょっとやつてみたくなっちゃって。それに夕馬くん、可愛いって、言つてもらえるかな～って」

言つて少し恥ずかしくなつてきた。

そんな私に夕馬くんは頭を撫でてきた。

「そっか、気付かなくて」めんね。とこうよつ穂菜は何しても可愛いから、その都度言つたらきりがな～よ」

「でも、でもね～、やつぱり意識的にやつたときは言われたいなあ

つて……

「やつだよね。穂菜、可愛いよ。また気が向いたら見せてね」

「うそ」

荷物を置き、リビングのソファーに座る。

「どうしようか？風呂まだ用意してないし、夕食もつまみと早いし」

「夕馬くん、私先にシャワー浴びていいかな？」

「シャワーだけで平気？」

「うん。あ、夕馬くんも一緒に入る？」

からかうように聞いてみた。

「嬉しい申し出だけ、『飯作っちゃわない？炒飯でいいかな？』

「ここよ。ここより夕馬くんが作るものに口をつけさせません。じやあお風呂行つときまく」

着替えを持ってお風呂場に入る。

「ふわ～、やつぱつしたあ

「穂菜、もう準備できたよ」

夕馬くんに言われてテーブルを見ると、確かに料理が出来上がっていた。

「うわあ、美味しそう

「ありがと～。じゃあ食べよ～

「う～

席について、いただきますの言葉と共に端を動かす。やつぱり夕馬くんの料理はおいしい。

パラパラ炒飯を租借していると、ひとつ小さな疑問があった。

「夕馬くん、今日こつもよじちょっと量少な田だね。そろそろ材料なくなってきた？」

「あ、違つよ。材料はあるけど、今日はひよりトマトサーター作つたか

「ひ

「ほんとつ～」

それを聞いて俄然食欲がわいた。

炒飯やおかずを一気に平らげる。

「デザート、デザート、デザート」

「穂菜、そんなに早く食べてくれるのは嬉しいけど、やめないと歯までいじだめだよ」

「大丈夫っ。高速で歯んだからっー！」

子供みたいな言い訳をしてると、夕馬くんがキッチンにデザートを取りに行ってくれた。

ほんの少しの時間が待ち遠しい。

夕馬くんが持つてきたのは、小さなホールケーキだった。

「え、夕馬くんそれ作ったのっ？」

「うん。今までは作つてなかつたけどさ、やっぱ今日は特別でしょ？ 本当のパーティーは三日後だけじか、まあフライングつてことで、いいかな？」

「う、うんっ！ 全然いいよっ！ はあ、夕馬くんの手作りケーキかあ。どんな味がするんだろう？」

中心にケーキを置き、夕馬くんが配つてくれたフォークを手にする。

夕馬くんは包丁を手に持ち、ケーキ入刀をする かと思いきや止
まった。

「え、夕馬くん？」

「…………めぐ。やつぱまつ」のケーキなしで

セツナヒトトタ馬くんは席を立つてケーキをキッチンの方へ運んでいく。

「え……あ、ちょっと、タ馬くんっーっ！」

私も慌てて立ち上がりて後を追う。

あんなおいしそうなケーキのビニールが駄目なんだろ？

そんな考え方をしていたためか、足下にある荷物に躊躇いてしまった。

タ馬くんを巻き込んで。

「あやあつー？」

「え、穂おつー？」

ビニール。

タ馬くんが下敷きになつたのであまり痛くなかった。

胸に埋くめていた顔を上げて、タ馬くんの安否を確認する。

「タ馬くん大丈

先の言葉が言えなかつた。

何故なら、タ馬くんの顔の上にケーキが乗つっていたから。

我に返ると、急いでケーキをどけようとした。
しかしその前に夕馬くんが、ケーキの上に腕を乗せてしまった。

「チツ、最低だよ……」

そんな夕馬くんの、憎々しげな感情が入った久しぶりの言葉を聞いた。

「」「めんなさ」「

「穂菜じゃないよ。僕自身に言ったの。穂菜のせいじゃない。ごめんね、最後の最後で僕が変なことして。今日大事な日にひどいことしちゃった」

夕馬くんの左手がそつと上に伸びる。
その手を掴み、私の頬に寄せた。

「」「めんね穂菜。本当にごめん。最後に訳分からないことして」

もしかしたら夕馬くんは泣いてるかもしれない。

夕馬くんはぐつと右腕に力を入れて顔に押しつける。
そのとき、ケーキの端から何かが飛びってきた。

なんだらうと手を伸ばしてみると、ジップロックの付いた小さな袋
だった。

どうしてこんなのがケーキの中に？

それを取り出し周りのケーキを取り除くと、何か入っていた。

指輪と、折り畳まれた紙。

「え？」

私は袋を開け、中身を取り出す。

その指輪には、見覚えがある。

これは今日のデートの一一番最初に見た、私が妙に気に入った指輪だった。

夕馬くんに答えが聞きたくて、顔の上のケーキを退けた。

「夕馬くんっ…これどうこう…？」

「……偶然ね、一週間前に穂菜があの店で立ち止まつてたのを見たんだ。声掛けようかなって思つたんだけど、穂菜すごい嬉しそうな顔しててさ、つい見惚れちゃつて。だからそれをこつそり買って、今日のためのプレゼントにしようつて思つたんだ。言つたでしょ？ サプライズしてあげるつて。ケーキの中に入れて、それを穂菜に食べさせて、つてやつ」

「で、でも、どうしてやめよつとしたの？」

「………… 肝心なのは紙の方でね

「紙?」

私は折り畳まれた紙をゆっくり開く。

「す、じ、迷つたんだ。書くかどうか。それで試してみたんだ
けど、やつぱり恥ずかしくなつて……」

紙を開かれたと、そこには見慣れた夕馬くんの字で、こう書かれてい
た。

『結婚して貰いたい』

73

「…………」

私は口元を手で抑える。

「穂菜、好きだよ。こんな、最後の最後でヘマするような僕でよか
つたら、結婚して貰いたい」

「や、や、や、う、う…………」

嬉しそのあまり涙声になりながら、私は前に倒れて両肘で体を支え
る。

「夕馬くん、夕馬くん、夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん！
ん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん！
夕馬くん！夕馬くん！」

何度も、何度も夕馬くんの名前を呼ぶ。

「夕馬くん！夕馬くん！好き！好き！好き！大好き！夕馬くんの」と
大好き！」

「僕も大好きだ」

「夕馬くんが思つてる以上に、私夕馬くんのこと大好き！…」

「僕も穂菜が思つてる以上に、穂菜のことが大好きだ」

「夕馬くん、私と、結婚してください」

「いじらじや、お願いします」

私たちは、自然にキスを交わした。

顔にケーキが付くのなんて気にしない。

お互いの好きを確認しあうように、長い口付けをする。

バーン！！

「穂菜ちゃん大丈夫！？無理やり押し倒されたりしてない！？」

「だからお前、夕馬がそんなことするわけ……」

突然の闖入者が現れた。

「あ、あれ？ ま、まさか穂菜ちゃんが押し倒してた？」

「これは俺も予想外すぎる展開……てか夕馬の顔に付いてるのって、クリーム？」

「ま、まさか女体盛りならぬ男体盛りー？ ほ、穂菜ちゃんやるわね……」

「…………」

私と夕馬くんは言葉を交わさず意志疎通をした。

ゆうべつと夕馬くんの上から廻る。

「あ、私たち退散するから続けてもいいよ」

「気にするな気にするな。でかい音聞こえたから来てみただけだから。悪いな邪魔して」

ゆうべつと立ち上がる夕馬くん。

「…………めえり」

「え、あの……夕馬くん？」

「え、えりした？」

「どうした、だと？」めえらの氣読みや口。何してくれてんだよ？僕、今相当にキレてるんだ。もつ今まで最高に

「「ヒ、ヒイイイイイイツ！？」

「一遍、死んでみる？」

第七話『貴女へのサプライズをしたかったのに』（後書き）

穂菜「タ馬くんっ！」

タ馬「穂菜、本当に『めんね。ちゃんと出来なくて』

穂「や、そんなことないよつー凄いサプライズで、本当にひくつ、嬉しくて……ぐすつ。つああ、涙が止まらないよお」

タ「ありがとう穂菜。読者のみなさん、僕のプロポーズはどういえないか？」

穂「ううん、タ馬くんのプロポーズ、凄い嬉しかったよつ」

タ「そう言つてもういえるな、僕も嬉しこよ。皆さん、七話まで読んでくれてありがとうございます。あ、これで終わりとこつわけじやないですからね。もひとつだけ続きます。感想や評価をくれたら嬉しいです。ほら穂菜」

穂「うん……。嘘をつくからもかつてここにタ馬くんの活躍を見てください」

タ「……穂菜、なんかそれだと、僕が言わせたような感じがしない？」

穂「え？ そんなことないと思つよ？ それに私の言つたこと事実だし」

タ「穂菜……」は素直に賞賛として受け取つておくとして、次回もよろしくお願ひします」

穂「よろしくお願ひします」

第八話　『「ことなるひあつす、本当にいりんですか？』

「もし、プロポーズはしたはこにかど、やつぱつり西親に会わなきや駄目だよね？」

夕馬くんとのケーキ騒動が終わって次の日の朝、朝ご飯の時にそつ言つてられた。

確かに夕馬くんの言つ通り挨拶は行かなきやならない。

でもうちの場合は……

「私のところは、行かなくて済んでほしくね……もつ親公認だし」

「うそ。それは僕んとこも同じだけど、許可とかじやなくて伝えたるべきたとね」

「ああ、夕馬くんの言いたいことは分かってるよ。でも、いつ行こつか？夕馬くん当分お休みないでしょ？」

「よく、夜じで。でも夜は平氣だから、穂菜が疲れてなければそのままの時に行こつかない」

「あ～、私次第か～。頑張ります。それで、時間帯はよじして、田につけよ～。」

ん～、とつなり声をあげながら考える夕馬くん。

「今日、とか？」

「早っー?」

プロポーズして次の日に報告なんて早すぎると思いつ。

他の人はどうだか分からぬけど。

「こや、これにはじりこりと僕の中で理由があつてね」

夕馬くんはやう前髪をかしてから喋り始めた。

「穂菜わ、婚姻届とか考えてる?」

「い、婚姻届……」

その言葉で改めて夕馬くんと結婚するんだとついひとを認識する。

「と、特にね……」

「無理なういんだが、やつぱつやつこいつのうんなんらかの記念日に届けたいなって思つてるの」

「記念、田?……あ」

やつぱつで言われたらわすがの私も気がつく。

」の先一一番近い記念日と言えど、明後日の初デート記念日。

「夕馬くん、それって明後日のことだよね? あつこいつのうんべぐ田来るものなのかな?」

「詳しきは分からぬけど、でも、早めの方がいいでしょ?」

「私は構わないよ」

「じゃあ穂菜、今日の夜……どうちからで行くか?」

「うーん、このうてイメージだけ女のところから行く
ね?」

「それは分からなくてないよ。じゃあ理屈をこの方からつけてね。」

パンツと手を叩く夕馬くん。

それを見て私も残りを頬張つて「わがままを言へ。
夕馬くんに食器を渡し、空いたテーブルの上にノートパソコンを開
く。

「よし、今日も頑張りつ

意気込みを入れて、文字を打ち出す。

夜。

私と夕馬くんは私の家の前に立つている。

「どうしよう。自分の家のことで緊張してきた……」

周りの人にも聞こえるんじゃないかと言つぽどに心臓が高鳴る。

「僕も同じ。いいで駄目だ、なんて言われたらどうしようつ」

「とにかく、入っちゃおつ

事前に私たちが来るといつを伝えておいたので、中止にならぬだ。

私を先頭に、自分の敷地内に入り、扉を開く。

「た、ただいま～」

「お邪魔します」

出迎えてくれたのはお母さんだった。

「あ、穂菜、夕馬君。お帰りなさい。はい上がつて上がつて

「さつ氣なく僕に？お帰り？と言つてゐなんですが

「気にしない気にしない。それで今日は何？夕馬君が穂菜のこと嫁にもうつてくれるの？」

なんで一発で分かったんだろつ。

私まだ？今日帰るね？としか言つてないのに。

「はい。穂菜を嫁にもらひに来ました。お義母さん、娘さんを僕に
ください」

なんごつことだらう、殆ど出合に頭で、しかも玄関で娘をくださ
いなんて、ムードなんてあつたものじゃない。
まあ、あらしこと書つたら、あらしこいんだけど。

「 もうタ馬ー、どうして今それを書つのー? 遅すぎよー、あんたたち付
か合つて何年経つてゐると思つてのー? 私は早く孫の顔見たいんだ
からねー! 」

対するお母様は、何故か既にタ馬くんのお母さん氣取りでいる。
確かに義理の母親にはなるんだけどさ。

「 て、うかお母さん、そろそろ家に上がつてこい? いくらなんでも
玄関にいっぱなしつて、いつのまじつかと想つよ。お父さんにも言わ
なきやだし」

「 まあそつね、お父さんー! 穂菜とタ馬が結婚するつてー! 」

「 まあそつか。今日はめでたいな」

軽つー?

「 一人の対応がめちゃくちゃ軽いよー?
こんなのでいいのー?
確かに嬉しげけどわあー! 」

「 穂菜、じつこのでいいのかな?」

隣でタ馬君もあきれ氣味に聞いてきた。

ある程度は親の反応を予想していたとはこゝ、ソリソリであつたつと
は思わなかつた。

「さあ上がりて上がりて。」飯はもう食べたのよね？」

「あ、うん……」

「ところが、もう用事は済んじゃったんですねけど……」

「気にしない気にしない。それより、どんな風にプロポーズしたのか、しっかりのうけでもらいつからね。覚悟しなさい」

やつはお母さんは半ば無理矢理私たちを部屋に引きもつこみ、いろいろなことを聞かれた。

そして私たちは私の部屋で一緒に泊まった。

第八話『「こなみつやつすかわい、本当にいいんですか?』(後書き)

穂菜「第八話です」

夕馬「あと残り一話だって。早いね」

穂「うん。一ヶ月もしないうちに元結婚したやつなんて」

夕「そうだね。もう二年まだ一ヶ月ぐらいしか経っていないんだね」

穂「短いな~」

夕「まあしようがなことよ。取り敢えず穂菜と結婚できぬ」とを喜ぼう

穂「そうだね」

夕「さて、感想の謝辞でも。K・i・i・t・t・iさん、感想ありがとうございます。K・i・i・t・t・iさんからはベストカップル賞というのを僕たちに貰いました。嬉しい限りです。繰り返しだが、ありがとうございます」

穂「ん~、終わっちゃったね」

夕「そうだね。じゃあ次回予告でもやつやつおつか

穂「え、そんなことして平気なの?」

夕「今回家ね。次回は、僕の両親に会つてきます。そして僕と穂菜、

快斗と千佳音の四人でパーティをします「

穂「えっと、楽しみにしてください。感想や評価は是非とも待つてます」

第九話『恋人同士なのに、脅迫してると?』

翌日の夕方。

今度は夕馬くんの『両親に会い』に行く。

「ただいま~」

「お邪魔します」

夕馬くんの家に入れば、夕馬くんのお父さんである九那柾さんが出迎えてくれた。

「お、穂菜ちゃんいらっしゃい。相変わらず可愛いね」

「ありがとうございます」

「で、今日は何?」

「お母さんもいる?」

「こらめど

「じゃあ一人に話

「はいよ

九那柾さんに連れられてリビングに入る。

「お～い、夕馬と穂菜ちゃんが来たぞ」

九那柁さんが中にいる夕馬くんのお母さん、萌未めぐみさんに声をかける。

「あらこりっしゃい。夕馬、ご飯は食べた?」

「まだだけど、どうじょうか悩んでる。でも前の前に話をしておこうかと」

家にいる全員が席に着く。

「なんの話?」

萌未さんが聞く。

「僕たち結婚します」

「…………」

一人はしばらく黙った。

この沈黙は怖かった。

うちの両親ほどではなくても、もっと早く答えがもらえると思っていたからだ。

二十秒ほどたつただろつか。

「「はあ～」」

一人は深いため息をついた。

「あ、あの、もしかして、私じゃダメ、でしょ？」「

「うう、それなりに夕馬くんの」両親とは仲良くなつてたとゆつてたのに……

だんだん気持ちが落ち込んでいく。

「あ、違ひの穂菜ちゃん、落ち込まないで」

萌未さんが慰めてくれた。

「二人は理名さんのところにまもつ」挨拶した？

「したよ。成り行きで玄関で」

「玄関で、まあ種原家らしいな」

九那柁さんが苦笑しながら言ひ。

私の家族と夕馬くんの家族は、私たちが付き合ひだししてじばりくした後に顔を合わせ、仲良くなつた。

「で、何か言われなかつたか？」

「…………結婚するの遅いって言われた」

「やつぱりな。俺たちのため息もそれだ。遅い、遅すぎる…俺たちが何年待つたと思ってるんだ！？夕馬が結婚できるのは十八だから四年だぞ…四年間何やつてたんだ！？もつと早く結婚しろよ…」

「そつよー。今の今まで新婚張りにイチャイチャしてるのになかなか結婚しなくて、お母さん心配してたんだからねー！」

「あ、あの、お言葉ですけど、私たちつい三ヶ月前まで学生だったんですけど……」

「学生が何ー？愛があれば立場なんて関係ないのよー！」

「いやいろいろめんどくさいでしょ。でか結婚遅いとか一人には言われたくない。一人、六人の中じゃ一番最後でしょ？確かに二十五、だっけ？」

「六人って？」

私は分からず訊ねる。

「僕と快斗と千佳音の三両親。因みに快斗たちは大学行かずに二十、千佳音たちは大学在学中に二十二」

「ちょっと待ちなさい夕馬。なんで夕馬が私たちの結婚した歳知ってるの？お父さん言ったの？」

「言つてねえよ。誰がお前との約束破るか」

「よね。さあ夕馬、早く教えて」

「都鞠さん。ああ、都鞠さんは快斗のお母さんね」

分からぬ私に教えてくれた。

「やつぱり都鞠か……。こつちゅ説教してじよつか」

「うそ、うだね

「ちよつと話逸らさないでよ。結局、一人より早く結婚する僕たちのことを遅いだなんだ言つのはやめてくれる?」

「ううう、夕馬がいじめる。昔は可愛くて、『ぼくめぐみちゃんのよめさんになるね』とか言つてくれたのに」

「穂菜、僕この家と縁を切るよ。そして、種原夕馬と乗ることにする。さ、いつまでも他人の九那柁さんと萌末さんとのところにいたらお邪魔だから、早く帰ろ。ではお一人とも、さよなら」

夕馬くんは私の腕を優しく掴むと、本当に泣いてしまった。後ろから聞こえる、『や、夕馬ー?ちよつと待つてー!』めん、私が悪かったから戻つてきてー!』と言つた詞はガン無視のようだ。

「穂菜」

しばらく歩いたところ、夕馬くんが私の名前を呼ぶ。

「何?」

「絶対他言無用、または忘却だからね」

「え?……あ、めぐみちゃんのよめさん?」

ガシッと肩を掴まれる。

「いい？絶対誰にも言っちゃダメだよ。むしろ忘れて。そうしないと僕は今の今まで別に知りうとは思わなかつたけど付き合つんだつたらこれを覚えておきなさいと理名さんから言われた穂菜の恥ずかしいペソードを全部口にしてしまうかもしないんだ。しかもしかも僕は一酸化中毒死をしてしまつかもしれない。お願いだから絶対言わないでね」

淡々と夕馬くんはしゃべつてこく。
無表情で迫られてるので物凄く怖い。

そして何が一番怖いかといつ。

「あの、夕馬くん、わ、私の恥ずかしペソードって？」

小さく声で聞くために夕馬くんの口元に耳を近づける。

「…………」

「ダメツ……」

夕馬くんの話を聞いて、思わず叫んでしまつた。

今の私は恐らく顔が真っ赤なのだろう。
物凄く熱い。

今度は私が夕馬くんの肩を掴む。

「夕馬くんお願ひー！ほんつとうー！本当にそれだけは言わないでー！お願いだからーーなんでもするからーー最悪浮氣も許すよー！だからほんつとうーと一緒に言わないでッー！」

私は必死に叫ぶ。

それほどまでに私にとつては黒歴史なのだ。

「じゃあ穂菜、僕のことも本当に言つちやだめだからね」

「言わないー本当に言わないータ馬くんも言わないよねー?」

「言わないよ。秘密にしてあげる」

「よ、よかつた~」

私は完全に気が抜けてしまい、タ馬くんにもたれかかる。

「……タ馬くん」

「何?」

「安心しすぎて腰抜けた……」

「……帰る? それとも外で何か食べる? 近くにあるよ?」

「は、早く座りたいから、外で食べる」

「じゃあ決定」

タ馬くんの肩を借り、私たちは近くのレストランで食事をした。

第九話『恋人同士なのに、脅迫してゐる?』（後書き）

千佳音「さて、今回の下手人はどいつだ?」

快斗「へいお頭。名前は畠山香樹、通称作者と呼ばれているやつで
『じぞこ』ます」

千「ほう、作者か。つれて参れ」

快「ははあ」

作者「…………何この三文芝居?..」

千「黙れ。貴様はそのような口が利ける人間か!?!?」

作「あ、い、いえ……」

千「まずは自分の犯した罪状を言え」

作「…………『その想いは変わりますか?』第六話の本文を、
操作ミスで消してしまいました」

千「その通りだ。貴様は何をやつている?」

作「すみません……。今、記憶を頼りに頑張つて執筆しています

千「そんなものは当たり前だ!全く、『その想いは変わりますか?』
の元になっている『四人の魔法使い』(百話到達おめでとう。千佳
音ちゃんも応援してるよ。皆もぜひ呼んでね。只今アンケート中だ

よ。参加してくれるとうれしいな（立派なことをねがしてこら）
んなことになるんだ！」

快「お頭、物凄い宣伝が入っています」

千「貴様は黙つてひーで、いつになつたら書き終わるんだ？」

作「あよ、今田中にはなんとか……」

千「ではわざと取りかかれ……」

作「は、はい……」

千「では次の者……」

快「なあ千佳音、もうやめないか？今更だけどさ、？お頭？つて賊とか棟梁とかのトップのことじやん。絶対罪を裁く人がお頭な訳ないじやん。設定があやふやだら」

千「うわ～んつーかいとがこぢめる～ひびこひびこーかいとのばかあーいじやんいじやんつー」

快「…………」

千「え、ちょっと、快斗？さすがに無視は厳しいよ？突つ込んでよ。せめて冷たい声でいいから何か言つてよ。ほんとに泣くよ？」

快「いや、今の、可愛いなーと思つて……」

千「ふえつ？え、え、あの、快斗君？あの、そんな……マジ？」

快「マジ」

快「いや、お前十分アドリブは強い方だと思つぞ?」

千「うるさい。もう恥ずかしそうだから歸るわーーじゃあねーー快斗ありがとうーー！」

快「じゃあねつて……俺も同じ家なんだけどな……」

第十話『これから先、どんなことがあつても幸せだ』

六月五日、今日ばかり夕馬くんも無理して休みをとつてくれたらしい。

なので朝に役所に寄つて婚姻届をもつこに行き、快斗と千佳音ちゃんに承認になつてもうつた。

そしてこの時物凄い歎息だことがあつた。

「お前どうしたよ？」「

夕馬くんが呟く。

少し前までは？樋口？といつぱりでいい、となつていたんだが、

「……夕馬くん、本当に萌未さんたちと縁切りたいの？」

苦笑しながら聞いてみた。

「本気と書いてマジだよ。真剣に種原とお乗りうつしてる

昨日過去の歴史をほじく返されて相当お怒りうつ。気持ちは分からなくなつた。

「縁切るときつて書類とかいるのかな？いるんだうつな。戸籍から変えたいわけだから」「

意味的だけじゃなく法的にも縁を切りたいらしい。これはボケで終わる様な感じがしない。

「 ゆ、タ馬くん。私、樋口穂菜って名乗つてみたいな、とか思つてゐただけど……」

希望を小さくしながら要求を出してみる。

「 こんな弱い理由じゃだめだから他に理由を考える。」

「 分かった。じゃあ樋口で行くね」

「ええっ！…早っ！…」

「 ……穂菜、一応マンションだから大声は出さないでね」

「あ、」めぐ

「 それから、そんな真剣に考えようとしなくても穂菜が言つならその通りにするよ。穂菜がどうでもいいって言つたときだけ、僕は種原を選ぶよ」

「 タ馬くん……。えっと、私は縁切らないでほしいな九那柁さんにはこうこうよくしてくれてるし」

「 穂菜、あの男はロリコンなんだ。昔一人が付き合つてた写真を見たんだけど、あの男十七歳なのにあの女はどう見ても十三歳だった。だから油断しないで。あの女の田がなくなつたら絶対抱きついたりしてくるから」

「 タ馬くん、せめて名前で呼んであげよーよ」

「 ……あなたをまたは氣をつけたね」

かなり嫌悪ついで名前を呼ぶ。

だんだん空気が悪くなってきたので慌てて話を返る。

「あ、あのセーじゃあやつぱつ夕馬くんって九那丸さんの血を引いてるんだねー。」

「言つてかなり空気が悪くなる」といはれていた。

思ひ返しても私が悪いのは明白だ。

「ビルが？」

「ドスの利いた声で返してくる。

私は私でテンパつて続きを言つてしまつ。

「だ、だつて、あのじゅの私がなり幼くて、そのじゅ夕馬くんが告白してきたわけだから夕馬くんも小さく子が好きなんだと、そういう……」

「穂菜」

夕馬くんは私の名前を呼ぶと一枚の紙を取り出した。

「離婚しよう」

「うふつと待つてえつーー、ビルしてーー、結婚もしてないのに離婚！？そしてなんで離婚届を持っているのーー、最初から離婚する気満々ーー？」

「？」

「「これは種原家から」」押借を

「ちよつと待つて」

今どんでもないことを聞いた。

「種原家？種原家って何？種原仗、理名夫妻のこと？」

「そうだよ」

「なんで一人がそんなもの持つてたの？」

「……あの一人ね、婚姻届を貰おうとしたときテンパつて離婚届くださりって言っちゃったんだって」

「ふつー..」

「それを家に着いたときに気づいて、でも行ったその日に婚姻届もらうのもかなり恥ずかしいからと言つことでほとばりが冷めるまで待つてもらいに行つたんだけど、その間に離婚届の存在を忘れ、最近掃除をして見つけたらしくて、そういう書類を見てみたって言つたら貰つた。一週間くらい前かな」

「そ、そんな面白エピソードがあつたんだ……。もつと早く聞いてればよかつた」

「安心して穂菜。」これは婚姻届だよ

夕馬くんはひらひらと婚姻届を揺らす。

「ねえ夕馬くん、『めんね変なこと言つたりやつて。私、本当に？樋口穂菜？つて名乗りたいの。こだわりがあるつてわけじゃないんだけど、私が夕馬くんの家族になりたいから、？樋口穂菜？つていう名前に変えたい」

明確に自分の気持ちを伝える。

するヒタ馬くんはボールペンを動かしながら言つ。

「分かった。穂菜の言つ通り、名字は樋口、僕は縁を切らない。それでいい？」

「夕馬くん、怒つてない？」

「怒つてないよ」

そう言つてヒタ馬くんは必要事項を書いていき、印鑑を取り出して捺印する。

「じゅ、穂菜も押して」

夕馬くんに紙を差し出され、慌てて印鑑を取り出して捺印する。

これで書くべきところは全て埋まる。

「よし、少し休憩したら出でに行こつか」

「つさー。」

「第7回！祝、夕馬と穂菜ちゃん初チユウ記念日＆

第一回 夕馬と穂菜結婚記念日に

「かんばり！」

その日の夜、私と夕馬くん、快斗君と千佳音ちゃんの四人でビールの入ったグラスをぶつける。

会場は私たちの部屋

アリーナには豪華な料理で埋まっている。

ふはー！ ゼーハンルは最高だねえ！」

千佳音ちゃんは一気に飲み干し再び自分でヒート川を注ぐ

千佳音ちゃん もう少しあみたいたよ

「実際オッサンでしょう。いろんな」と快斗に任せっぱなしで、いつもうるさいしてゐるんでしょ?」

「いや、流石にそれは悪いと思つて家事の一通りはやつてるわ」

「結構綺麗にしてくれてるぞ」

「いや、金稼いでなくて養つてもらつてゐるんだから当然でしょ」

「そんなことないってば。わたしは言わば家政婦。快斗からお金を取りない代わりに、飯と住み場所を提供してもらってるの」

「物は言こようだね」

「でも快斗君としては結構楽なんじゃない?帰つたら何もしなくて」

「まあな。専業主婦つてやつか。助かってるよ」

「それに比べてうちの嫁は……はあ」

「ゆ、タ馬くん!なんでため息つぐの…?そりゃあ料理は出来ないけど……でも掃除くらいはしてるよつー」

「飯を食べながら談笑していると、不意に快斗君がしみじみと呟いた。

「それにしても、俺らに具合に収まつたよな」

「ここ具合つて?」

千佳音がやんが聞き返すと、それにタ馬くんが答える。

「僕たちの関係のことでしょう。高校、ていうか中学の頃は三角関係じゃなくて四角関係だったんだし」

「四角?……あ、ほんとだつー。」

私は驚くよつこにして声を上げた。

確かに昔は、タ馬くんは私のことが好きで、私は快斗君のことが好き

きで、快斗君は千佳音ちゃんが好きで、千佳音ちゃんは夕馬くんが好きで。

今思えば凄い人物関係だつたんだな。

「一番最初にその関係ぶちこわしたのつて、穂菜ちゃんになるのかな？」

「私、なのかな？快斗君あきらめたから

だから」「いや、それ言つなら俺じやね？俺が千佳音諦めて沙鳥に行つたん

「あ～、そうだね～。高一のはじめだけ？快斗が沙鳥に行つたんのつて」「

「そうそう。見事に玉砕。で、千佳音と、ゴーリイン。千佳音じめんな、なんか一番田みたいな風になつて

「いいよ。気にしないし。今も幸せですから

そう言つて千佳音ちやんはビールを何度も口になるか、一気に飲み干す。

「ふはあーねえ夕馬

「何？」

「わたし夕馬好き。結婚しよう

「こいみー

「ちょっと待つて！ 婚姻届出してすぐ浮気！？ 流石にそれはないんじゃないのかなー？」

絶対千佳音ちゃん酔つてる。

夕馬くんは……分かつて乗ってるのかな。

「じゃあ俺ら結婚しようつか」

すると今度は快斗君がからかうように言つてきた。

「だあめ。快斗はわたしの～！ 夕馬もわたしの～。じゃあ逆ハーレムだ！ 一人よ、どんとわたしを愛しなさい！ 胸は穂菜ちゃんより大きいから気持ちいいよっ！」

「千佳音ちゃん、下ネタはやめよ!」
一応お祝い事なんだし」「

「ほうほひ、つまり穂菜ちゃんは嫉妬なんだね？自分のねつぱいじや挿んだりしじこたり出来ないから

「ちが、千佳音ちがん……」

今のは二回目だ。

「私だけはそのへりこ出來るもんつーー。」

べらつと夕馬くんと快斗君が私たちの頭をそれぞれ叩いた。

「快斗ーー！何すんだあーー？わたしじゃダメって言つのかーー？ちっちやい穂菜ちゃんの方がいいのかあーー？」

「わのそろセクハラ発言はやめろH口おやじ」

「おやじーー？わたしゃ男じゃないよーー何快斗いつの間にかそっちに目覚めちやつた？いやいや引くわーー！やっぱりわたし夕馬の愛人になるーー！夕馬ーー！ちつき結婚するつて言つたもんねえ。絶対だからねえーーあ、赤ちゃんはダメだよ。わたし養えないからーー」

「……毎度のことながらわりいなーー人とも」

「別に、気にしなくて言こよ。十佳音うちじつやうじうか」

「夕馬くんつ。私だつて出来るんだよーーただやらないだけだもんつ。やれつて命令されねばやるもんつ」

「はいはーー、そうだよーね。それよつそろそろ酒が回つてきたからおねんねしじうね」

そう言われて頭をなでられる。

「そんなん、私全然酔つてないよーー？でもなでなでしてくれるなら
言つ通りにしてあげる」

「そつ言つたら夕馬くんはなでるぞーーか優しくだきしめ、その上頭
をなでてくれた。

「よしよーし、これでどういへ聞くなつた？」

「はああああああああ、きもちいいいいいいいい」

だんだん瞼が重くなつていいく。

「ああっ！ 夕馬くんちスルい！ お父さんわたしあやってほしーーー！」

「はいはい」

千葉はまた、なんど決斗の声かほんせりと聞こえた。

いよいよ癪でしまいそーだ

「ゆーまぐん」

۱۰۰

「けいこんおめでとー」

……うん
ありかど二
穂菜も結婚おめでとう」

そして、

こんな幸せな今日から一年、

正確には二〇六十一日後。

「はい、こんな感じでいかがでしょうか？」

マイクさんが声を掛けてくれた。

「うわあ……」

私は鏡を見て感動を覚える。

純白のウエディングドレスを着た私に。

今日は遂に夕馬くんとの結婚式だ。

今の今まで大変だった。

主に周りからの結婚式の催促で。

結婚したという報告をしたら、ほぼ毎日いろんな人から私たちにメールが来た。

こうじうのは私たちの一番の記念日になりたい、だから待つてて、
という理由を告げでも構いなしだ。

正直何度もノイローゼになりそうになつたか。

そこは夕馬くんが優しくしてくれたから何とかなつたけど。

今日のためにたくさんの人々が来てくれた。

それを自分の目で見て確認したときは凄く嬉しくて、結婚式が始まつてもいよいよ泣きそうになつた。

この嬉しさはCointeさんという方から小説の初感想をくれた

ヒカルの嬌声に匹敵する。

私の今着ているウエディングドレスはシンプルなものだった。フリルやレースも少なく、胸元にリボンがあしらわれているくらいだ。

これを選んだのは値段が手ごろというのもあるんだけど、一番の理由はあまり派手に着飾りたくないからだ。

お祝い事なんだから綺麗な服を着るべきなんだわけれど、だからこそ、自分の大切な日だからこそシンプルで、自分自身で行きたいと思った。

夕馬くんに話したら、『それでいいと思つよ。無理に着飾る必要はないし』と頷いてくれた。

「ありがとハヤコ。それでいいと思つよ。無理に着飾る必要はないし」と頷いてくれた。

「もういたしまして」

麗です」

ヒカルと笑顔で返される。

「ンンン。

するとメイク室のドアが叩かれた。

「すいませーん、長嶋ですが、入つてもよろしいでしょうか?」

千佳音ちやんだ。

ヒカルが千佳音ちやんを追い返す理由もないのに招き入れる。

「え? そー」

「失礼します」

扉が開くと、千佳音ちりちゃんだけでなく梨久ちゃんと董ちゃんもいた。

「あ……穂菜ちゃん」

最初に口を開いたのは董ちゃん。

「ん?」

「いや、凄い綺麗だよ。ねえ?」

「うん、穂菜凄い」

「くく、あいがど」

「…………」

董ちゃんの呼びかけに梨久ちゃんは答えるけど、何故か千佳音ちりちゃんは黙つたままだ。

「千佳音、どうしたの?」

「く、あ、『めんつ、普通に見惚れてた……。穂菜ちゃんす』」
「いよ」

「千佳音ちりちゃんもありがど」

「じゃあ穂菜さん、私は席を外しますね。何かあつたら呼んでください

れこ

『氣を利かしてくれたマイクさんと外に出てくれた。

「ねえ、やついえば董ちゃんと梨久ちゃん知り合いでいたの？」

「まね。て言つても五分前にだけ」

「千佳音経由でね。やつあそこだばつたり。私は梨久さんのファン
だつたから千佳音に紹介してもらつて」

「やつこつ」と。……ねえ穂菜ちゃんが、凄い綺麗すぎない？」

千佳音ちゃんが顔をのぞきながら聞いてくる。

「やつ、かな？マイクのおかげかも」

「あ～いや、そんなマイクだけでこんな変わるとは思えないんだよ
ね～。昨日会つたのとは全然違つ」

「そりややつでしょ」

と梨久ちゃん。

「結婚式よ？結婚式。そんな一大イベント直前になつたら内面も変
わつて綺麗になるつて」

「まあ女なら当然だよね」

「ちよつと董、なんかその言い方わたしは女じやないつて風に聞こ

えるけど。」

「こやこや、千佳音さんもいるしょ。樋口の夕馬君とか源の快斗君からもよく聞くよ。」

「あんのあほんだら…よりこもよつて梨久に言つ?なんか恨みでもあるのかしり?」

千佳音ちゃんがぶつぶつ言つてると、董ちゃんが話しあげてくれた。

「穂菜ちゃん、緊張してる?」

「うん。もう心臓バクバク。ほら、私職業柄人前に出ないから余計に……」

二人にはいつだつたか仕事については話した。

「そりいやそりやだね。演劇の私とは正反対。そりいや千佳音は一ト抜け出せた?」

「え、千佳音は一トなの…?この不景気のなないわ。あ、いや、不景気だからなのか」

「ああつー!何勝手に言つてるの…?もうひちゃんとコンペーのパートやつてるつて。言わなかつた?」

「言われてはない。メールじゃ見たけど」

「そんな屁理屈いらんつーつて、わたしの話じやなくて、穂菜今更だけどほんとにその服でいいの?あ、いや可愛いんだけど、ひょつ

と味気なさすぎない?」

「いいの。なんかいろいろつけて派手にしたのとかも、自分を偽つてる気がしちゃうんだよね。つけねばつけるほど自分を隠しちゃうみたいに。だから生身のまま、最低限の衣装で挑みたいの」

「へえ、穂菜ちゃんも結構考えてやつてるんだね」

「一応は、ね。大切なことだし」

「あ、そだ。穂菜ちゃん行つておかないといけないことがあったんだ」

千佳音ちゃんが思い出したよつて言つた。

「何? どうしたの?」

「お願いがあるんだ」

「お願い?」

「わたしにブーケをくださー」

ペコっと頭を下げる。

「いやあちよつと待つてよつ! 千佳音ちゃん快斗君ともうつづづんでしょ? いらないんじやないかな?」

「いやもつとリラブしたいつ。田標は穂菜たち程度までいきたい」

「ちよつと待ちなわー」

千佳音がやんの言葉を董ちゃんと梨久ちゃんが同時に止める。

「千佳音、その目標だけはやめたやほうがいい！気が触れるぞ！？」

「ほんとに」これは親切心で言つけど！一回あの一人のバカツプルぶり見たとき、正直引いたわー！あんないちやつきはないー！」

……梨久ちゃんと董ちゃんがひどいことを言った。

別に私たちの間に氣が触れる葉とか引かれるに言葉に書いてないし。

「あ、そろそろ時間かな」

千佳音ちゃんが備え付けの時計を見て言った。

「じゃ、穂菜ちゃん。本番で歯がないように気をつけてね」

少しだけテンションが下がると、向こうは逆にテンションを上げて出て行つた。

「ふう」

大きく息をついて椅子に座る。
緊張のせ一もあつてか少し疲れる。

するとまたすぐに扉が開く。

今度はタキシード姿の夕馬君だった。

「あ、夕馬くん」

「ひりひり歩いてくる。

「どう穂菜？お疲れのようだけど」

「ん~、千佳音ちゃんたちがさつき来ててくれて、緊張のせいで凄い疲れた、かな。夕馬くんは？緊張してる？」

「あんまり、してないかな。正直言つちやえは、結婚式やつたからつて何かが変わる訳じやないでしょ？ずっと一緒に。僕が穂菜を愛して、穂菜が僕を愛して、それを快斗と千佳音がからかって。それは変わらないから緊張はしてないよ」

「まあ、確かに変わらないけど、でもやっぱり結婚式だから恥ずかしいよ」

「そんな簡単には切り替えられないか」

ひとつ間を空けて、わたしの名前を呼んだ。

「穂菜」

「何？」

「可愛いよ」

「あれ、可愛いなの？」

「うん。可愛いよ。なん ああ、千佳音たちが何か行つたの？綺麗とか」

「な、なんでわかるのそんなこと？」

「まあ考えれば分かるよ。それより、嬉しくない？可愛いじや」

「ううん。凄く嬉しい」

「ならよかつた」

しばらく心地好い沈黙が流れる。

「あのや」

夕馬君が口を開く。

「本当に今更かもしけないけど、あの時僕を選んでくれて本当にありがとうございました。穂菜のお陰で僕は幸せだったよ」

「ちょっと夕馬くん？なんかお別れの言葉見たくなつてるよ？」

「ああ」「めん」「めん。そんなつもりはなかつたんだけ。ただお礼が言いたかつただけ。今まで一緒にいてくれてありがとう。これからも一緒にいてください」

「もう夕馬くん。結婚式直前の言葉じゃないよ。一緒にいるから結婚式やるんだから」

私は苦笑した。

「それはそうなんだけれどね。今思つてのせりれな訳だし。「ごめんね、いい台詞全然出てこなくて」

「大丈夫だよ。無理に言葉にしなくとも、それなりには夕馬君の気持ち、分かつてゐるつもりだよ。私も夕馬くんと一緒にいたいよ。ずっと一緒にいたい。おじいちゃんおばあちゃんになつても一緒にいようね」

自然と笑みがこぼれた。

いつの間にか、緊張もほぐれている。

「うん。ありがとう」

「どういたしまして」

「もうひとつ、いいかな?」

「なあに?」

「改めていいます。僕は、穂菜が好きです。愛します」

私は目を見開いた。

言葉にではない。

あの夕馬くんが、満面の笑みを浮かべている。

とても柔らかくて暖かくて、何より幸せそな笑みを。

私は、暖かくなっている胸を抑える。

すると我慢の限界が来て、涙が溢れ出てしまう。

「え、穂菜？ びびったの？？」

夕馬くんが少し焦る風にして話しかけてくる。

「うん……あのね、私、夕馬くんとつきあい始めてね……ひとつだけ自分に課題を出したの」

「課題つけて？」

涙で声が震える。

それを少しでも抑えて、なんとか喋れるようになる。

「夕馬くんをね、笑顔にすること。子供の頃夕馬くんが千佳音ちゃんに向けた笑顔を、私がして上げること。私、ずっと千佳音ちゃんに嫉妬してたの。私の見たことのない夕馬くんを知つて。だから絶対夕馬くんを笑顔にさせるんだって。あ、誤解してほしくないんだけど、千佳音ちゃんのことが嫌いなわけでも、今までが幸せじゃないってことじゃないよ。でもね、八年間ずっと笑顔にすることを考えてね、それが今日叶つたことが本当に嬉しいって……」

私は夕馬くんの胸に飛び込む。

「夕馬くん、ありがとう。私を好きになってくれて。私を愛してくれて。私を傍で支えてくれて。私に、最高の笑顔を見せてくれて。私も夕馬くんのことが大好きです。絶対、夕馬くんの傍から離れません。私のこと、一生愛してくれますか？」

「うん。愛するよ」

即答してくれた夕馬くんは、優しく抱きしめてくれた。

そして自然と顔を近づけ、キスを交わした。

それは今までのどのキスよりも熱く、短かった。

「穂菜、そろそろ行こうか」

「うん。」

私たちは腕を組み、幸せを胸に抱き皆の元へ足を運ぶ。

私は願う。

どうか私たちの幸せがいつまでも続きますように。

皆に願う。

どうか私たちの幸せが皆の元へも届きますように。

幸せの在処は皆人それぞれ。

同じ物なんてありはしない。

でも、だからこそ必ずひとつは皆の幸せはある。

その一つを、私は見つけた。

見つけていた。

私のそれは人を愛すること、人から愛されること。

心が温かくなり、気持ちが高鳴る。

こんな心地好いものを作りたい。

自分の幸せが遠くにあっても諦めないでほしい。

自分の幸せが消えそうになつてもあがいてほしい。

一人の幸せは、周りにも広がっていく。

だから。

私は願う。

どうか私たちの幸せがいつまでも続きますように。

皆に願う。

どうか私たちの幸せが皆の元へも届きますように。

第十話『これから先、どんなことがあっても幸せですか』（後書き）

夕馬「皆さん、今まで『その想いは変わりますか？AFTER STORY』を拝読していただき、ありがとうございました」

快斗「H23・4／30、第十話をもちまして、この小説は完結しました。ここまで続けてこれたのも、読者の皆様が応援してくれたおかげです」

千佳音「高校時代のわたしたちを見ててくれた方は六十話、九ヶ月と十六日。AFTER STORYから見ててくれた人は十話、一ヶ月の間、お疲れさまでした」

穂菜「私たちの活躍はもう終わっていますが、ふと思い出してくれると嬉しいです」

千「とまあこんな堅つ苦しい挨拶はその辺で、終わつた～！」

快「そうだな。俺は正直一回もH23デイニングが見れるとは思つてなかつた」

穂「まあこれ結構思い付きで始めた奴だからね」

夕「作者曰く、僕の笑顔はほんの三日前に思いついたんだって」

快「ほんと思つて付きだな～ってあれ？今思つと俺だけ夕馬の笑顔見てない？」

夕「……快斗、僕は快斗に笑顔を見せるフラグは立ててないから、

いくらそつちの人でも無理だよ？」

快「俺は正常だ！！」

千「ねえ、これどうなるんだろつ。またか『その想いは変わりますか？AFTER STORY AFTER STORY』とか始まらないよね？」

穂「それは、流石にないと思うよ？無理ありますわし」

夕「だろうね。多分『その想いは変わりますか?』シリーズは、何か強い要望が複数ない限り終わりだよ」

快「じゃあそろそろ最後の挨拶を」

タ「Colt やん、kiitiさん、感想をありがとうございました。一人の言葉はかなり励みになりました」

穂「総合評価12pt、お気に入り件数6件。この六人の方々、お気に入りに登録してくれてありがとうございました。楽しんでくれたでしょうか?」

快「P.V.1550、ユニーク484。これだけの人が来てくれたのには感謝してもしきれませ」

千「感想や評価は終わつた後にモいつでも受け付けています。気軽に文を送つてください。では皆、せえのつ！」

穂&タ&快&半 - - - 今まで ありか
とつございましたつ---」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0684s/>

その想いは変わりますか？AFTER STORY

2011年11月11日04時15分発行